

オンライン開催の「ぼうさいこくたい」に大学の教室から参加する学生たち=日進市の名古屋学芸大で



若い力で支える福島復興

東日本大震災から九年。日進市の名古屋学芸大では今年、学生有志四人が被災地を視察し、地域の課題解決に取り組んだほか、二人が復興庁の「復興・創生イニシアティブ（就業体験）」に参加した。これらの活動報告を三日、広島市で開催の防災イベント「ぼうさいこくたい2020」（内閣府など主催）で発表する予定だったが、新型コロナウイルスの影響でオンライン開催に。休校で学内発表会もできなかった学生たちに、活動について話を聞いた。

今年二月下旬の三日間、第一原発二十キロ圏内で全域、学生四人は福島県南相馬市に避難指示が出されたまじの地区は、津波で家が押しつぶされた跡地に太陽光パ

ネルがずらりと並んでいたという。デザイン学科三年の中島康貴さん(20)は「子どもが安全に遊べる屋内施設建設や給付金支給など、子育て世帯を増やそうとするまじの強い思いを感じた」。管理栄養学科三年の服部麻那さん(20)は「一人に優しいまじの強さを指したり、再

名学芸大生4人被災地での活動語る



④地元の農家の案内で二メートルハウスを見学する学生たち
⑤津波で家屋が流された跡地に設置された太陽光パネル。いずれも2月、福島県南相馬市で(増田さん提供)



特報館

透させる仕組みをつくる必要がある」と課題を設定し、解決のため再訪を予定していたという。だが新型コロナウイルスの影響でかなわず「すこく残念」と肩を落とした。

また約一カ月間の「イニシアティブ」では、管理栄養学科三年の平尾達気さん(20)が宮城県石巻市のこうじをやる企業に就業。地元飲食店に「こうじの栄養価や作り手の思いを説明するセミナー」を企画開催。同学科二年の武田菜己里さん(20)は、岩手県洋野町の食品会社で、廃棄されるおからに目を付け、大豆加工品の新商品開発に携わった。

同大では二〇一四年から二年二回、栄養管理やデザインを学ぶ学生をボランティアとして派遣。石巻市で無料食堂を開いたり、宮城県南三陸町の団地で住民と交流を深めたりしてきた。

また「イニシアティブ」参加者は、現地の企業に約一カ月就業。石巻市の水産加工会社と開発したアナゴを使った「穴玉丼」が介護食として商品化されたこともある。

学生と被災地の橋渡し役を務める同大地域連携推進研究機構の石原貴代講師は、「この学びをもとに若い力で何ができるか考えることが大切。新型コロナウイルスでいろいろな機会が失われたが、コロナも災害。日常と異なる生活に対応する力を磨いてほしい」と学生たちに期待していた。